

鹿児島県の保育者養成校における模擬保育の実践考察

Simulated Childcare Practice at the Nursery Teacher Training Facilities in Kagoshima

藤川和也・中村礼香・丸田愛子・宇都弘美

Kazunari Fujikawa, Ayaka Nakamura, Aiko Maruta, Hiromi Uto

鹿児島女子短期大学

現行の幼稚園教諭教職課程および保育士養成課程の保育の内容では、保育の指導法および方法を習得することの重要性が示され、幼児教育および保育現場においても、保育実践力が重視されている。そこで筆者らは、模擬保育の実践を通して、保育の指導法および方法のより充実した養成を目指している。本稿では、その一端として、実施計画を整理したうえで、実習生の準備段階における教員による指導の概要をまとめ、その有用感と学生の保育実践への意欲への影響について、質問紙調査を通して検証を行った。その結果、専門分野の教員による指導や助言が、詳細な指導案作成に役立ったと評価されていることが明らかになり、詳細な指導案の作成と保育実践への意欲に、正の相関関係があることも示唆された。

Key words：模擬保育、指導案作成、専門分野の教員、指導法

simulated childcare, design of lesson plans, specialized faculty, teaching method

1. はじめに

現行の幼稚園教諭教職課程および保育士養成課程では、領域の内容と指導法が整理され、一体的に学習する構成となり、より保育実践に即したカリキュラムとなっている。教職課程の保育内容の指導法では、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して、保育を構想する方法を身に付けるという全体目標が定められた。具体的には、幼児の認識・思考、動き等を視野に入れた保育の構想の重要性の理解、具体的な保育を想定した指導案の作成、模擬保育とその振り返りを通じた保育を改善する視点を獲得が到達目標として示されている¹⁾。

また、現行の保育士養成課程では、「子どもの理解に基づく保育の実践的内容の充実として、保育を行うに際しては、環境を通じた保育の観点から、子どもの理解と、それに基づく保育の実践力を身につけることが重要であると整理された²⁾。保育内容演習の目標では、子どもの発達過程に即して、具体的な保育場面を想定しながら、環境の構成、教材や遊具等の活用と工夫、保育の過程（計画・実践・記録・省察・評価・改善）の実際について理解することが記述され、具体的内容には、保育における子どもの生活や遊びを総合的に捉え、保育を展開していくための方法や技術、子どもの実際や状況に即した援助や関わりについて具体的に学ぶことが示されている²⁾。このように、両課程の保育の内容では、保育の指導法および方法を習得すること

の重要性が述べられている。

一方、幼児教育および保育現場では、これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力として、5領域の教育内容に関する専門知識を備えるとともに、5領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には幼児を理解する力や指導計画を構想して実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等、幼児期の学校教育を実践していく専門家としての側面から見ていく必要があるとまとめられている。子ども達に生きる力を育むことを基本とし、何を学ぶ（身につける）のかに加えて、「どのように学ぶか」という教育・保育の方法についても、改善することが求められている。具体的には、「主体的・対話的で深い学び」の視点が示され、内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることがイメージされている³⁾。養成課程だけでなく、幼児教育および保育現場においても、指導する力を重視していることが読み取れる。

日頃より保育者養成に携わる筆者らは、保育内容に関する科目に加えて、実習科目も担当しており、保育の指導法および方法の養成について課題意識を持っている。そこで今回、実習科目で模擬保育を実践したことを振り返り、考察することで、保育の指導法および方法の養成における一考察になるのではないかと考えた。

近年の模擬保育に関する研究では、その方法論や効果に

ついて整理・考察がなされている。例えば、松井（2004）は、模擬保育体験を通じた保育者としての配慮についての学び検証し⁴⁾、河北（2012）は、模擬保育の自己・他者評価を行い、学びの内容や程度を分析、模擬保育と実践力養成の関連を検証している⁵⁾。上村（2013）は、視聴覚教材を活用した遊びを考察する取組を通して、子ども理解を出発点とした保育実践を展開する即応力の基礎となる、思考プロセスの形成の重要性を示唆している⁶⁾。田爪・小泉（2006）は、学生の保育者アイデンティティの確立、それを促す模擬保育の授業運営のあり方を議論し⁷⁾、上月（2019）は、実習経験のない学生の模擬保育での学び・気づきを8つに分類し考察している⁸⁾。このように、近年の研究では、模擬保育における学生の学びについて報告されているが、教員による模擬保育の指導の在り方を検討するものは少ない。これらを踏まえて本稿では、実施計画を整理したうえで、実習生の準備段階における教員による指導の概要をまとめ、その有用感と学生の保育実践への意欲への影響について考察することを目的とする。

2. 令和2年度の保育所実習Ⅱ（学内実習）の模擬保育の実施計画について

2-1 模擬保育実施の経緯

新型コロナウイルス感染症の拡大の状況を鑑み、本学では年度当初より実習期間変更の可能性から学内実習に切り替えることまでを視野に入れ、協議を始めた。協議においては、厚生労働省子ども家庭局保育課から各都道府県指定保育士養成施設主管課に対する、令和2年6月15日の「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」や、実習協力園に対して6月上旬、7月中旬に行った受け入れに関するアンケートへの回答結果も踏まえて進めていった。協議の結果、7月下旬に次の4点を考慮し、鹿児島県くらし保健福祉部子育て支援課に学内実習への切り替え判断について相談し、回答を得た上で、学生全員を学内実習に切り替えることを選択した。

- ① 実習を予定していた施設の多くから今年度中の受け入れは難しいとの回答があった。
- ② 受け入れが出来ない施設で実習を予定していた学生の新たな実習先を本年度中に探すのが困難である。
- ③ 今後も状況により実習直前、実習中の受け入れ中止等の回答が増えることが懸念される。
- ④ 「1. 養成施設の運営に係る取扱い（1）」において、「養成施設にあっては、新型コロナウイルス感染症の対応等により、実習中止、休講等の影響を受けた学生

と影響を受けていない学生の間に、修学の差が生じることがないように配慮するとともに学生に対して十分な説明を行うこと」を踏まえたうえで学びの保障をする。

次に、学内実習の内容を設定するに当たっては、厚生労働省による「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（平成30年4月27日付け子発0427第3号厚生労働省子ども家庭局長通知）」にある「保育実習実施基準」や、「教科目の教授内容」、「教科目の教授内容」と本学「保育所実習Ⅱ」シラバスを踏まえた。中でも、「目標」として掲げられている「3. 既習の教科目や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び子育て支援について総合的に理解する。」、「4. 保育の計画・実践・観察・記録及び自己評価等について、実際に取り組み、理解を深める。」を達成できるように、「内容」の「4. 指導計画の作成・実践・観察・記録・評価（1）全体的な計画に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価と保育の過程の理解」とも関連が深いと考え、模擬保育を実施することとした。

2-2 模擬保育の実施計画

（1）模擬保育に関する演習の構成

以下、模擬保育に関する演習の構成を整理する。

- ① 実習担当者による素案の添削指導を受ける
- ② 活動テーマをもとに、5つの分野に分かれて準備グループを構成し、指導案作成や教材研究等に取り組み、各分野の専門教員による指導・助言を受ける
- ③ ワード形式のデータで指導案本案を完成させ提出する
- ④ 学科で用意する教材・教具リストから、発表で使用する教材・教具を選び、その他に必要な教材等がある場合は新規購入物品として申請する
- ⑤ ホーム制をもとに、10の発表グループを構成し、模擬保育の発表に取り組む
- ⑥ 1発表毎に、発表グループ内の質疑応答の時間を設け、採点教員による指導を受ける
- ⑦ 模擬保育後は、指導案本案に、計画と実際が異なった箇所の赤字修正をし、反省欄の記入後、提出する
- ⑧ 1日分の日誌に、4名分の模擬保育を記録し、加えて、模擬保育用の日誌を作成・提出する

（2）模擬保育に関する期間と時間数

- ・準備の期間：令和2年8月17日（月）から21日（金）90分×8コマ、計720分
- ・環境設定の期間：令和2年8月26日（水）と28日（金）90分×2コマ、計180分
- ・発表の期間：令和2年8月26日（水）と28日（金）90分×8コマ、計720分

- ・他一部に、課題の時間を活用して、準備を進める実習生も見受けられた。

(3) 実習生数

- ・令和2年度児童教育学科保育所実習Ⅱ履修者 192名

2-3 指導の実際

本稿では、準備段階に焦点をあて、特に上記①②の取り組みについて報告する。令和2年度の保育所実習Ⅱでは、模擬保育の準備期間を①実習担当者による指導（90分×4コマ計360分）と、②専門分野の教員による指導（90分×4コマ計360分）とに分けておこなった。

(1) 実習担当者による指導の概要

本学科では、実習開始までに指導案の素案を用意することを実習生に指導しているため、実習開始までの期間の取り組みとして、担当保育の素案提出及び実習担当者による添削指導が行われていた。そこで、模擬保育の準備期間のはじめに、再度、素案の再検討の時間を設け、学内実習用に改訂することを指導した。

(2) 専門分野の教員による指導の概要

模擬保育への準備を進めるにあたり、実施方法を検討した。同じ活動テーマの実習生同士で意見交換や相談をすることによる学びの深まりと、保育内容及び教科に関する指導法を担当している教員（以下、専門分野の教員という）による指導の効果を期待し、活動テーマに応じた準備グループ構成と教員配置で実施することにした。そこで素案の活動テーマを整理したところ、大まかに5つの遊びに分類され、分野に応じた専門分野の教員を配置した。準備グループの分類と教員配置をまとめたものが、表1である。

表1 準備グループの分類と教員配置

準備グループ	実習生数	担当教員数	全体運営
造形遊び	97名	4名	3名
運動遊び	30名	1名	
魚釣り遊び	23名	1名	
集団ゲーム	22名	1名	
音楽遊び	18名	1名	
案再検討	2名		
計	192名	8名	3名

造形遊びは、季節に応じた製作活動が主であり、美術・造形を専門とする教員が担当した。ただし、このグループは実習生数が多かったため、保育士の実務経験のある教員等を追加で配置した。運動遊びでは、サーキットやボール

を使うものがあり、体育を専門とする教員が担当した。魚釣り遊びは、児童文化を専門とする教員、集団ゲームは数量を扱う遊びで、数学を専門とする教員が担当した。音楽遊びは、音を扱う遊びがほとんどであり、表現・リズムを専門とする教員が担当した。また全体運営も含めた指導担当として、実習担当者を配置した。各準備グループの具体的な活動内容としては、教材研究、環境構成の決定、指導案本案の完成、リハーサルと設定した。

丸田・中村・藤川・宇都（2021）によると、気軽な雰囲気の中で質問・相談・意見交換をする機会を設定することが、指導案作成で苦勞した際の解決法の1つとして期待されることが報告されている⁹⁾。このことより、同じ活動テーマの実習生同士で意見交換や相談をすることで、学びが深まっていることが考察されるが、筆者らの調べでは、模擬保育の活動テーマと保育内容及び教科に関する指導法を担当している専門分野の教員による指導についての関連を検討するものは見受けられなかった。

そこで、実習生にアンケートを実施し、評価を行うこととした。結果については、次の章で報告する。

3. 質問紙調査による模擬保育の検証

本章では、実習後に行った「実習指導等の指導案作成に関するアンケート」を元に、第2章で述べた模擬保育の実施計画の中における「専門分野の教員による指導案作成指導」の部分を取り上げ、その意義や、指導案作成と保育実践への意欲との関連について分析を行う。

3-1 質問紙調査の目的

学内実習で模擬保育を行った際、実習生の指導案の内容に基づき、運動、造形・製作、音楽、ゲーム（集団ゲーム・魚釣り遊び）の4分野に分かれて指導案の検討を進め、専門分野の教員による指導案作成の指導を行った。この形式で指導案指導を行うことは本学では初めてのことであったため、実習生にとって専門分野の教員による指導が役に立ったかどうか、また模擬保育の指導案作成を行うことで保育実践への意欲が高まったかどうかの調査を行った。

3-2 質問紙調査対象及び調査時期

調査対象者は令和2年度に保育所実習Ⅱを履修した192名である。事後指導を終えた令和2年10月に質問紙調査を行い、128名（回収率66.6%）からの回答が得られ、有効回答数は122であった。質問紙には、研究として結果を使用すること、不使用による学業等への不利益を被ることはないこと、個人が特定されるものではないことを記載し、対象者から同意を得た。

3-3 質問項目

本稿においては、「実習指導等の指導案作成に関するアンケート」の中の2つの項目を取り上げ、分析を行った。今回の分析対象とした質問項目は以下の通りである。

質問(5)「2年次学内実習：模擬保育の指導案作成では、専門分野（運動・造形・製作・音楽・ゲーム）の教員による指導案指導が役立ちましたか？」

質問(6)「1、2年次：担当保育・模擬保育では、指導案作成をすることで保育実践への意欲が高まりましたか？」

各質問で、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「思う」「思わない」「どちらともいえない」の5つから1つを選択し、自由記述にてその回答を選択した理由を記述する形式とした。

4. 調査結果及び考察

4-1 専門分野の教員による指導について

質問(5) 2年次学内実習：模擬保育の指導案作成では、専門分野（運動・造形・製作・音楽・ゲーム）の教員による指導案指導が役立ちましたか？

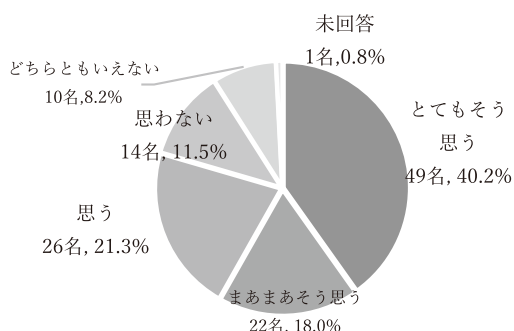


図1 質問(5)の回答結果

質問(5)「模擬保育の指導案作成では、専門分野（運動・造形・製作・音楽・ゲーム）の教員による指導案指導が役立ちましたか？」という質問に対し、回答の結果は「とてもそう思う」49名(40.2%)、「まあまあそう思う」22名(18.0%)、「思う」26名(21.3%)、「思わない」14名(11.5%)、「どちらともいえない」10名(8.2%)、未回答1名(0.8%)となった(図1)。この結果から97名(79.5%)は役に立ったと感じていることがわかる。

その理由として記載された自由記述を、類似の回答をまとめて以下の6つの分類に絞り込み、集計して分析を行った(図2)。

① 活動内容についての具体的なアドバイスをもらうことができた

② 配慮する点や工夫することなどについて学ぶことができた

③ 自分では考え付かないアイデアをもらうことができた

④ 年齢に合った活動について学ぶことができた

⑤ 時間配分や活動の進め方など指導案の書き方について教えてもらうことができた

⑥ その他

①については31名が記載しており、「運動遊びで色々な動きを提案してもらい、全身を動かす活動になった」、「造形・製作の教材のことを詳しく教えてもらった」、「専門的な視点でアドバイスをもらえたため学びになった」といった内容が見られた。②については、21名が記載しており、「気を付けたほうが良いところや、工夫したほうが良いことを学ぶことができ、役立てることができた」、「活動中に気を付けるべきことがわかった」、「実際に子どもの前ではなかったからこそ、子どもの前で実践するときにはどのような配慮が必要なのか理解できた」、「ゲームの工夫の仕方を学べた」といった内容が見られた。③については6名が記載しており、「自分にはないアイデアを教えてもらった」、「自分一人では解決できなかったことや、思い浮かばなかったアイデアを与えてくれた」といった内容が見られた。④については11名が記載し、「運動について、子どもたちの発達を踏まえたうえで年齢に合った活動を考えられるようになった」、「製作活動について子どもの発達を比べて教えていただいた」、「年齢に合わせて難易度を変えることができた」といった内容が見られた。⑤については7名が記載し、「ご指導いただいたことで指導案通りに進めることができた」、「保育の流れを考えられた」、「時間配分や進め方について指導いただいた」といった内容が見られた。その他の意見として、「分野ごとで同じ人たちの工夫を知ることができるいい機会になった」、「初めて専門の先生の指導を受け、学ぶことが多く楽しかったし興味がもてた」といった内容が見られた。

これらの記述から、専門分野の教員が指導を行うことで、子どもの発達年齢を踏まえた、より具体的な活動についての指導を受けることができたことから、模擬保育であっても子どもの姿を具体的に想像することができるようになり、指導上配慮が必要な点や工夫点も指導案作成に反映することができたということが言える。また、その他の意見にもあるように、同じような活動内容の学生が一つの教室に集まって指導を受けたため、お互いに指導案や試作品を見せ合ったことで、自分にはない発想のアイデアを知ることができたようである。

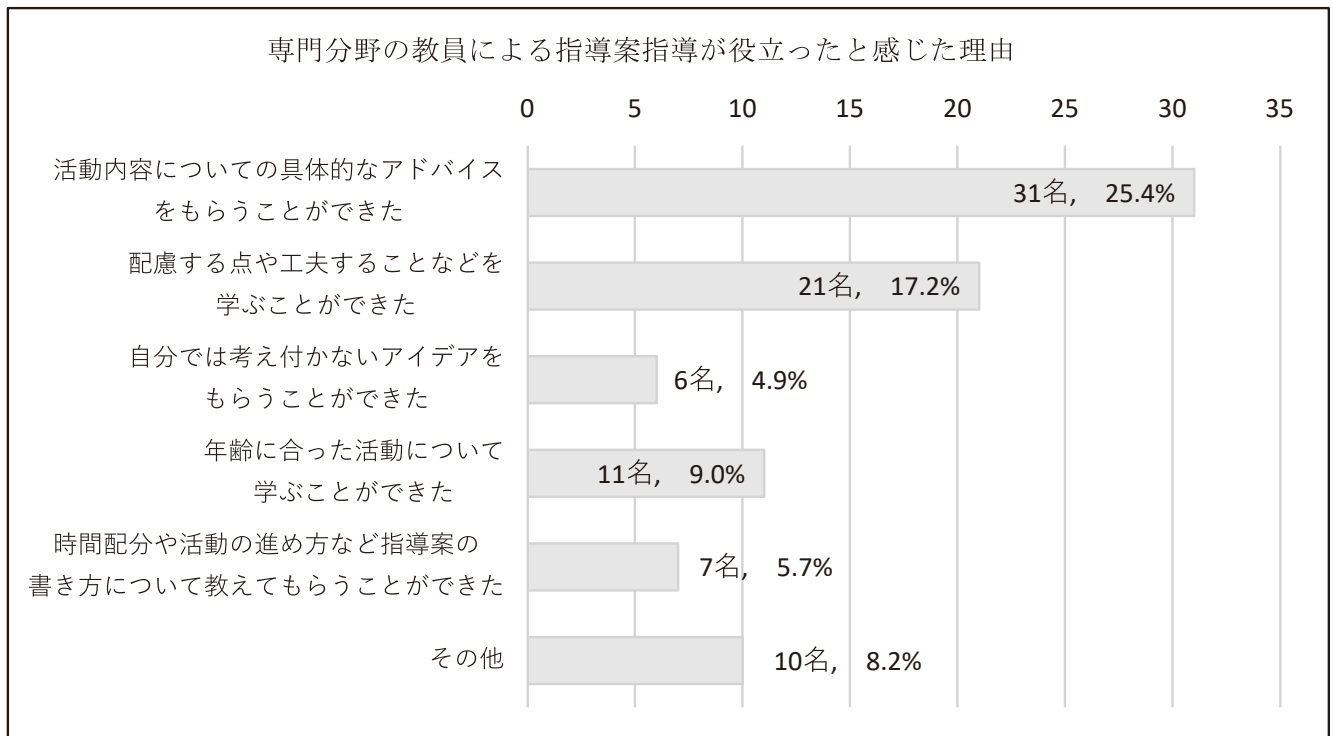


図2 質問（5）の自由記述の分類

普段の指導案指導では、分野に関係なく教員が分担して指導を行っており、専門外の内容について具体的に指導することが難しいと感じる場面もある。例えば音楽の教員が運動遊びについての指導案を作成する学生の担当になった際は、指導案の書き方についての指導は行いつつ、具体的な活動内容については体育の教員に相談に行くように伝えたり、逆にリトミック活動の指導案について、専門ではない教員が担当だった場合は音楽の教員のところに行くように伝えたりと、教員同士で協力し合って指導を行っていることもあるが、今回のように全員の指導案の内容を集約して専門教員で分担を行ったことは初めてであった。そういった取り組みが学生たちの指導案作成にどのような影響を与えたか意見を集約するために今回の質問紙調査を行ったが、専門教員が指導案指導を行ったことで、学生の学びをより深めることができていることがわかった。

4-2 指導案作成と保育実践への意欲との関連について

質問（6）「1、2年次：担当保育・模擬保育では、指導案作成をすることで保育実践への意欲が高まりましたか？」という質問に対し、回答の結果は「とてもそう思う」51名（41.8%）、「まあまあそう思う」37名（30.3%）、「思う」22名（18.0%）、「思わない」3名（2.5%）、「どちらともいえない」8名（6.6%）、未回答1名（0.8%）となった（図3）。

質問(6)「1、2年次：担当保育・模擬保育では、指導案作成をすることで保育実践への意欲が高まりましたか？」

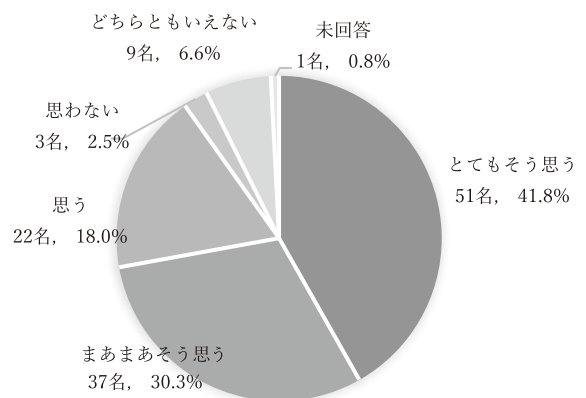


図3 質問（6）の回答結果

この結果から110名（90.2%）は指導案作成をしたことによって保育実践への意欲が高まったと感じていることがわかる。

その理由として記載された自由記述の内容が多岐に渡っており、分類することが難しかったため、その記述の中で、複数名が記載していた言葉をキーワードとして抽出した上で整理し、検討した。自由記述の内容は表2に示す。

最も多かった言葉は「イメージ・想像」(22名、18.0%)で、「当日のイメージがつかめた」、「子どもが楽しむ姿を想像することができた」といった、保育実践のイメージができたことにより、子どもたちのために頑張りたいという意欲が高まったという記述が見られた。次に多かった言葉が「流れ」(16名、13.1%)であった。「流れがわかることで保育に余裕をもって取り組むことができる」「指導案を作成することで流れが把握できる」といった指導案作成によって保育全体の流れを把握することで意欲が高まったという記述が見られた。3位は「考える」(14名、11.5%)であった。「指導案を書くことでどのように保育をするか考えることができた」、「指導案を書くことで必要なものなどを考えることができた」、「頭の中の計画を書くことで『もっとこうしよう』や『こういう援助が向いているかも』と考えることができた」といった記述が見られ、指導案作成によってより細かいところまで考え、具体的に保育をイメージすることができるようになり保育実践への意欲が高まったのではないかと考えられる。

他のキーワードを見てみると、「子ども」、「活動」、「援助」、「反応」、「保育者」という言葉からは、指導案作成の時点で保育者の立場として子どもの反応を考えて援助や活動内容を考えることによって保育意欲が高められたり、「準備」、「計画」、「把握」、「見通し」、「具体的」、「明確」という言葉からは、指導案を作成することによって保育の見通しを立てることができ、事前準備をしっかりと行うことで実践への意欲が高められたりしていることがわかる。さらに、「落ち着いて」、「安心」、「反省点」、「気付き」という言葉からは、指導案を作成することによって、当日保育に余裕をもって取り組むことができ、実践から様々な気付きを得たり反省したりすることで次の保育への意欲が高まったという記述も見られた。

一方で、「思わない」と答えた3名の自由記述を見てみると、「自分の書いた指導案と同じようにしないといけないというプレッシャーがあり意欲が減ってしまった」、「指導案を書くのにいっぱいいっぱいになった」、「指導案作成が大変で意欲が低くなった」と述べられていた。保育実践への意欲が低下した理由として、指導案を書くことに困難さを感じ、保育実践が負担になってしまったことが推察される。

この質問紙調査の結果から、指導案作成と保育実践への意欲が関連していることがわかった。指導案を詳細に作成することができれば、保育を具体的にイメージして実践に向けた準備を行うことができ、当日の保育への取り組みへの

自信や気持ちの余裕に繋がり、実践への意欲が高まっている。逆に指導案作成に不安や苦手意識を感じると、実践に対する意欲も低下してしまう。指導案作成に困難さを感じる学生へどのように指導を行っていくかが今後の課題だとも言える。

表2 質問(6)の自由記述内容

なんとなくだけイメージが持てたから
当日のイメージができて子どもの楽しんでいる様子がイメージできたから
当日のイメージがつかめたから
保育現場で自分が担任となり保育する姿をイメージできたためやってみたいという気持ちが高まった
指導案を作成することで自分の保育のイメージが沸くから
指導案を作ることでイメージができた
イメージを持つことができたので意欲が高まった
指導案を作成することで、より実際の保育のイメージをすることができたため
子どもがどうしたら楽しく活動に取り組めるか保育の様子をイメージしながら取り組んだ
イメージをもって取り組むことができたから
指導案を作成することで少し不安が軽くなったから子どもたちと活動するイメージができたから
作成するのは大変だったが、書いたことでイメージはできたから
自分の保育がどのような感じなのかをイメージすることができた
イメージを持てると思った
頭の中でイメージしやすくなり、本番での緊張を少し和らげることができているから
活動に対して見通しが立ち、子どもたちへの活動の様子、反応を想像しながら作成できるから
子どもが楽しむ姿を想像することができたから
計画通りに進めるとは思っていないけれど、指導案を作ることで自分が子どもの前に立った時、流れを想像して落ち着いて笑顔で関わることができると自信がもてたから
指導案を書くことで子どもの様子を想像して考えることができる
指導案を作成することで、実際に保育する姿を想像し書き始めるため意欲が高まった
いろんな想像をすることで意欲が高まった
作成することでどうしようか頭の中で想像できたから
流れや援助を書いておくことで活動を進めやすかったから
作成することで、流れを確認することができたり、必要な準備物などを確認したりすることができる

鹿児島県の保育者養成校における模擬保育の実践考察

指導案作成をすることで、自分の保育の流れが目に見え、安心して保育に臨むことができたから
指導案を作成することで流れが把握できるから
作成することで流れの把握ができるから
流れを把握することができた
前もって流れを考え、より良い保育を考えたいので保育ができるから
活動の流れを把握して保育をすることができるから
流れを理解できたから
保育の流れを頭にいれることができ、何が必要か準備物も理解できた
書き出すことで流れをつかみやすくなった
考えることで、流れを決め、取り組みやすくなるから
流れがわかることで保育に余裕をもって取り組むことができる
流れがつかめたから
指導案があることで自分の保育の流れがわかったり、このような援助をしたら良いんだと気付いたり学んだりした
指導案を書くことで子どもの様子を考えることができる 子どもに楽しんでもらえるために頑張ろうって思える
指導案を書くことでどのような保育をするか考えることができたから
自分の中でどんな保育にしたいか書けた
保育をする上で指導案を考えることの大切さを学ぶことができたため指導案作成に追われる部分もあり準備との両立が大変だった
指導案を書くことで必要なものなどを考えることができた
頭の中の計画を書くことで「もっとこうしよう」や「こういう援助が向いているかも」と考えることができた。それによって保育の意欲も高まった
実際に指導案を作成することで子どものする活動を詳しく考えたり、援助を詳しく考えることで、保育実践への意欲を高められた
1 から自分で考えやりたいことをすることができたから
準備物なども時間を見つけて進んで準備することができたから 作りながらも担当保育について考えることができたから
子どもの立場に立って考えることができたから
どうすれば成功するか考えることができたから
どんな反応するのかを考えることで高まった
子どもたちのことを考えながら指導案を考えられたため
自分でどんな保育をしたか考えることができるようになったから
頭で考えているだけではうまくいかないので、しっかりと準備をして取り組むことで意欲が高まった

考えていくうちにこうしたい！こうなってほしいな！と思うことができた
活動を考え、作成することでさらに楽しみになった
指導案を作成することで活動の見通しが立てられ、援助がしやすい
自分が保育者として活動している実感がわいた
子どもの好きな活動や保育者の動きを明確にすることができるから
指導案を作成することで、細かい内容まで事前に準備することができたため
指導案作成は、保育実践への準備にはなるが、意欲が高まるよりは不安の解消になると思うから
実際に保育をして準備の時点で気付くことができなかった留意点を見つけることができ、意欲が高まることに繋がったから
指導案を作成することに意義があるとはわかっているが、逆に緊張感が増したり準備の調整が大変だったから
見通しを立てることによって自分の理想の保育がわかるから理想に近づこうと頑張るから
何も計画しないで保育するよりも、事前に案の計画を立てることで自分の保育に関する見通しをもつことができた
保育の際に気を付けることなどを指導案を通して確認できたから
指導案を立てることでスムーズにできた
具体的に計画を立てることで幼児への配慮するポイントを意識できた
指導案を作成したことで自分が子どもに伝えたいことが明確になり、実際に保育をしたいと思えたから
指導案を基に行うことの大切さや自身で把握できたり振り返ることができた
指導案作成をして安心することもあるけど、その通りに活動できるか不安にもなる
反省点を整理することができ、次につなげることができるため
反省点を克服したいと思った
落ち着いて保育できた
指導案があることで落ち着いて保育に臨むことができた
保育の進め方を細かく書けたので、保育実践の際焦らず行うことができたから
指導案を書くことで気付きがある
経験を少しでも重ねていくことができ、改善点を見つけることに繋がった
自分の苦手とする分野がわかったから
書き方を学ぶことができた
保育のことが学べたから

5. まとめ

模擬保育の実施計画を整理したうえで、実習生の準備段階における教員による指導の概要について明らかにした。指導の工夫として、指導案のテーマに応じて準備グループを構成し、テーマに応じた専門分野の教員による指導を試み、その有用感と保育実践への意欲について実習生にアンケートを実施した。結果、専門的な指導や助言が、詳細な指導案作成に役立ったと評価されていることが明らかとなった。さらに、詳細な指導案の作成と保育実践への意欲に、正の相関関係があることも示唆された。このことから、模擬保育の準備段階の指導方法の1つとして、専門分野の教員による指導を位置づけることができるのではないかと筆者らは考察する。

今後は、今回の結果を踏まえて、模擬保育の発表と評価を整理し、模擬保育の教育的効果を明らかにすること課題とする。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：教職課程コアカリキュラム、2017
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
- 2) 厚生労働省：保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）[報告書]、2017
- 3) 文部科学省：これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力と教員養成段階に求められること、2017
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/19/1385791_5.pdf
- 4) 松井寿美子：領域表現（造形）の授業方法に関する研究Ⅰ—造形の模擬保育における問題点—、日本保育学会大会発表論文集第57号 pp:134-135、2004
- 5) 河北邦子：保育者養成における音楽表現指導実践力についての研究Ⅰ—模擬保育の自己・他者評価調査を通して—山口学芸研究第3号 pp:55-73、2012
- 6) 上村昌：保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察、高田短期大学紀要第30号 pp:85-94、2012
- 7) 田爪宏二・小泉裕子：保育者志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討：模擬保育の実践を通して、鎌倉女子大学研究紀要13号 pp:27-38、2006
- 8) 上月智晴：保育内容総論における模擬保育と学生の学び」京都女子大学教職支援センター研究紀要（第1号）、pp:15-27、2019
- 9) 丸田愛子・中村礼香・藤川和也・宇都弘美：保育実践力向上のための指導法の検討—指導計画案作成に関するアンケート調査から—志學館大学教職センター紀要第6号 pp:3-13、2021

(2021年12月23日 受領／2022年1月6日 受理)